

10月号の主な記事： 『アルルの女』

これまで好評をいただいていたヴァリエーションの解説記事に代わり、今月号から名作バレエを取り上げた連載が始まります。今月号の日本語ページは、その初回、『アルルの女』(振付ローラン・プティ)の抄訳です。



『アルルの女』リハーサルでの、エステバン・ベルランガと高橋絵里奈 .Photo: E. Kauldhar/Dance Europe

ロンドン市内ジェイ・ミュージズにあるイングリッシュ・ナショナル・バレエのスタジオでは、『アルルの女』のリハーサルが佳境に入っていました。青年フレデリ役のエステバン・ベルランガは、クライマックスの舞台三周のマネージュの終盤に差し掛かったところで息が切れ、足が止まってしまいました。これが二度目の通し稽古でしたが、「今までで一番ハードな役」だとか。指導していたルイジ・ボニーノも、ベルランガに同意です。「スタミナ面では『白鳥の湖』全幕や『マノン』のデ・グリユ以上にきついですね。ローランは当時のマルセイユ・バレエのスターで、力強く官能的だったルディ・ブリアンのために、このバレエを作りました。スパルタクスもこなしているポリシヨイのイワン・ワシリエフさえ、こんな難しい役は踊ったことがない、と嘆いていましたよ！」

ベルランガは、プティのバレエではスタミナを要求される一方で、ステップと爆発的な強い動きが一体になっていて、身体がとても自由になると言います。「技術的にあまり強くない」と自己分析する彼にとっては(超絶技巧が売り物のタイプではありませんが、じつにクリーンな技術の持ち主です)、確かにこのソロは最後の難所のようなものでした。

フレデリはアルルの女(舞台には登場しません)に焦がれて狂気に陥り、自分を愛する娘を捨てて、このマネージュの果てに窓から飛び降り、死んでしまいます。『アルルの女』は、体力だけでなく感情表現の面でもノンストップで続く、45分間の持久走のような作品です。ベルランガは「役柄にはとても自然に入っていますが、ほとんど出さずばかりで、しかも動かずにいる時間も長く、ステップでごまかすことができません。神経がすり減ります。疲れている時に、客席にそう気づかれたくないでしょう？緊張もそれと同じですよ。」

花嫁役のヴィヴェットは、恋人の心が他の女性に移ったことを知りながらもひたすら愛し続ける、絵に描いたような「善良な女」。とはいえ、それがイコール退屈な存在というわけではありません。プティの振付は彼女の繊細さを洗練の極みと呼ぶべきレベルで引き出し、初々しい花嫁の幸福感は、冒頭の場面でポワントとフレックスの繰り返しが表現する無邪気な喜びや、やさしさに満ちたしぐさによって輝きわたります。ヴィヴェット役の高橋

絵里奈によれば、「バレエの始まりから終わりまでに、大きな変化があるんです。リハーサルが始まった頃、私は早くからエモーショナルになりすぎてしまいました。ルイジは、フレデリの心が離れていくのを感じとっていき様子をもっと小出しにするようにと指導してくれました。」

パ・ド・ドゥも独特で、「普通は二人で自然にコンタクトを取り合うものですが、ここでは全く目を合わせないんです。それなのに、すべてが物語と固く結びついているので、動きを通じてお互いを感じ取れるんです。」恋人をつなぎとめておこうと心を砕く娘の役を演じる上でのボニーノのアドヴァイスは、「いつも同じように」だったとか。「そうしながらもその都度変わっていき、感情にも変化を込めなくてはいけないのだと気づかされました。」

フレデリが正気を失うにつれ、場面はますます内面の悲劇へと傾いていきます。ヴィヴェットが衣装を脱ぐのは結婚による二人の結びつきの象徴ではなく、彼女の存在そのものの否定であり、「心が完全に壊れてしまう瞬間」なのではと、高橋は分析します。ヴィヴェットのソロではタンデュ・ア・ラ・スゴンドが繰り返されますが、これは自分の周りで崩壊してゆく世界をどうにかして形に留めておこうとあがく、彼女の哀しみの表出です。「ステップ自体はとてもシンプルですが、ただ正確に行えばいいというものではなくて、とても難しい。公演のたびに疲れきってしまいます。この1幕のバレエにどれほどのエネルギー

が必要か、本番を踊るまでわかりませんでした！でも、本当に好きな作品です。」

『アルルの女』でのエステバン・ベルランガと高橋絵里奈 Photo: E.Kauldhar/Dance Europe



プティはこのバレエを、原作のストーリーと「宿命の恋」という主題に忠実に展開する一方で、簡素な白と黒の式服風の衣裳を着た村の若者たちの振付にも才気を発揮します。今回群舞の一員だったジェイムズ・ストリーターによれば、「ステップ自体はシンプルで問題なさそうに思ったのですが、いざつなげてみると完全に別ものだった」とか。古典に馴染んだダンサーであればこそ、プティ独特のアン・ドゥオールからバラレルなポジションへの切り替えには、戸惑うところもあったのかもしれない。(訳:長野由紀)